

若年受刑者の特性に関する研究（その1）

—特に時間的展望について—

矯正協会附属中央研究所 廣橋 秀山
 松村 猛
 水上 好久
 中勢 直之
 淵上 康幸*
 東京矯正管区 門本 泉**

キーワード：若年受刑者の特性，時間的展望，時間的指向性，未来考慮

I はじめに

受刑者ことに若年受刑者の犯罪性の固着化を防ぐために早期に治療的ないし教育的処遇を施す必要があるという認識は歴史的に古く、かつ、今日においては世界的に共通したものとなっている。

わが国においても、年齢26歳未満の成人受刑者はY級（Young）に分類され、個別に特技や適性の発見が図られ、人格の可塑性に期待して積極的な生活指導が行われており、体力増進のためのスポーツ活動等、処遇上、特別の配慮がなされている。

また、Y級は、犯罪傾向の進んだ者から悪影響を受けるのを防ぐため、あるいは処遇上の必要性からYA級とYB級とが分離收容されている。前者は受刑者の一般社会への復帰の問題であり、後者はもっぱら刑務所内での秩序維持の問題である。さらに、若年受刑者の中でも犯罪傾向が比較的進んでいるとしてYB級に分類された受刑者は、最も処遇困難な受刑者であるというのが通説になっており、こうした者に対しては別の意味で特段の配慮が必要となっているが、いずれにおいても若

年受刑者の特性を把握しておかなければ有効な処遇を行うことはできない。

本研究は、こうした問題意識において、若年受刑者の特性を把握し、その処遇に資するために計画された。

II 目的

若年受刑者の特性を明らかにし、処遇計画策定のために必要な提言を行うことを目的とする。

まず、刑務所における收容分類級を基準とし、犯罪傾向の進んでいないYA級の者と、犯罪傾向が進んでいるYB級の者との2つに分け、比較検討を行う。

次に、懲罰の有無により2つに分け、比較検討を行う。

さらに、若年受刑者の心理特性のうち、時間的展望に焦点を当てる。

世には、将来の好ましい結果のために現在の利益を犠牲にしてもよいとする人々と、将来起こるであろう結果よりも現在の利益を優先にすべきとする人々がいる。こうした個人差を心理学的に説明しようとする場合の概念

*現新潟少年鑑別所

**現東京少年鑑別所

が、時間的展望（注1）である。

こうした時間的展望が、若年受刑者の出所後の進路決定の度合いや犯罪性と、どのように関連しているかについて検討を行う。

Ⅲ 方法

1 調査実施時期

平成10年10月1日から同年11月1日まで

2 調査対象者

本調査の調査対象者は、男子の懲役受刑者で、主たる収容分類がYA級（26歳未満の成人で、犯罪傾向の進んでいない者）、YB級（26歳未満の成人で、犯罪傾向の進んでいる者）のうち、本調査時において、すでに分類調査を終了していた者である。

3 調査対象庁

比較的多く若年受刑者を収容している施設に対し、各施設の規模に応じ、在所している該当受刑者数の2分の1から5分の1の比率で調査を依頼する階層非比例標本抽出法（注2）を採用した。特定施設に偏らぬようにとの配慮は、施設風土の影響を考慮したものである。

調査対象者の抽出においては、特定の傾向を持った受刑者に偏らないように、称呼番号をもとに一定間隔で対象者を抽出する系統抽出法を採用した。また、調査はあくまで任意であり、調査の協力を拒否した受刑者については、その意志を尊重するようにお願いした。したがって、職員用調査票の記録があっても、受刑者用調査票が白紙となっている場合もありうる。

なお、各庁あたりの対象者数は次のとおりである（括弧内の比率数は当該施設の該当受刑者数に対する比率である。）。

YA級 5庁

川越少年刑務所 130名（約5分の1）
奈良少年刑務所 90名（約5分の1）
佐賀少年刑務所 70名（約3分の1）

函館少年刑務所 70名（約2分の1）
松山刑務所 40名（約2分の1）
計 400名

YB級 7庁

松本少年刑務所 70名（約3分の1）
水戸少年刑務所 70名（約4分の1）
姫路少年刑務所 40名（約3分の1）
佐世保刑務所 70名（約3分の1）
盛岡少年刑務所 60名（約3分の1）
釧路刑務所 60名（約2分の1）
高知刑務所 30名（約2分の1）
計 400名

4 調査内容

調査票は、職員用調査票と受刑者用調査票の2種類で構成されている。

(1) 職員用調査票

次の24項目について、刑務所職員に記入を依頼した。

調査項目

- 1 施設番号
- 2 刑名
- 3 生年月日
- 4 入所日
- 5 刑期
- 6 罪名
- 7 入所度数
- 8 収容分類級
- 9 反社会的集団所属の有無
- 10 本件共犯の有無
- 11 IQ相当値
- 12 M J P I 粗点
- 13 自殺未遂歴
- 14 薬物乱用歴
- 15 配偶者関係
- 16 身元引受人の有無
- 17 最終学歴
- 18 入所前職業の有無
- 19 施設歴

- 20 調査時現在の累進級
- 21 入所時から調査時までの懲罰回数
- 22 調査時現在の等工
- 23 仮釈放申請に係る面接実施状況
- 24 その他特記事項

(2) 受刑者用調査票

全部で74問からなる質問紙を用いた。質問は次の9種類の尺度で構成されている。

① 未来考慮尺度

淵上・出口(1996)によるもので、「将来のことをあれこれ空想するのが好きである」など、現在の行動を決定する際に、将来のことをどれくらい考慮するか、ということに関する内容の14問で構成される。回答は、「そのとおり」「まあそのとおり」「どちらともいえない」「ややちがう」「ちがう」の5つの回答の中から選ぶ5件法になっている。この尺度は非行少年を対象に作成されており、今回、若年受刑者に実施するのに際して、内容を変えない程度に表現を改めた。なお、本尺度はAlan(1994)のConsideration Future Consequences(以下、CFCと略記)を参考に作成されたものである。

② 時間的指向性尺度

白井(1989)によるもので、「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切なのはいつですか。また、その理由も書いてください」と教示し、過去・現在・未来のうちから1つを選択し、その理由を記述するよう求め、選択理由の記述を白井の基準によってカテゴリー化し、それに基づき、ポジティブな未来指向、ネガティブな未来指向、ポジティブな現在指向、ネガティブな現在志向、過去指向の5タイプに分類される。

③ 時間的信念尺度

白井(1993)によるもので、「どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない」などの時間的展望に対する個人的価値体系に関する内容の12項目で構成され、回答は5件法になっている。

④ ローカス・オブ・コントロール尺度

鎌原・樋口・清水(1982)によるもので、「幸福になれるか不幸になるかは、努力しただい」などの18問で構成され、回答は5件法になっている。ある出来事を自分自身の行動の結果であると認知するか(内的統制)、それとも、自分では制御できない外的要因に起因すると認知するか(外的統制)を測るものである。得点が高いほど内的統制であることを示す。

⑤ ネガティブ事象の受容性尺度

宮戸・上野(1998)によるもので、「物事には失敗はつきものだ」など10問で構成され、失敗やネガティブな事象に対し、動揺して自分を見失うことなく、精神的に余裕を保つことができる程度を測定する項目である。回答は5件法であり、得点が高いほどネガティブな事象に対する受容性が高いことを示す。

⑥ 支援的ユーモア志向尺度

宮戸・上野(1998)によるもので、「気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます」など8問で構成され、回答は5件法であり、得点が高いほど支援的ユーモア志向が高いことを示す。

⑦ 自尊感情尺度

Rosenberg.(1965)によるもので、「だいたいにおいて、私は自分に満足している」など自分の評価に関する内容の10問で構成され、回答は「そのとおり」「まあそのとおり」「すこしちがう」「ちがう」の4つの回答の中から選ぶようになっている。

⑧ 職業意識に関する質問

総務庁青少年対策本部が継続して実施している世界青年意識調査「世界の青年との比較からみた日本の青年」からの抜粋で、「働く目的」、「転職についての考え方」についてを問うもので、回答は選択肢から1つだけ選ぶものである。

⑨ 受刑意識に関する質問

片倉他(1998)による受刑意識に関する質

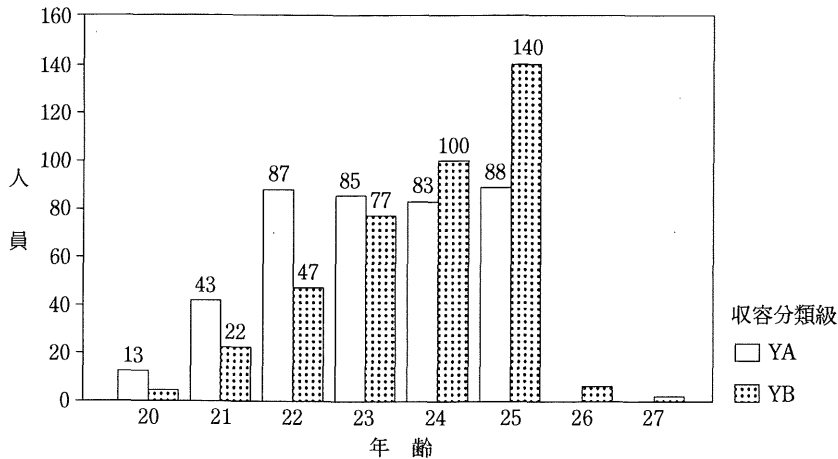


図1-1 収容分類級と年齢

問項目で、最近の体調、受刑生活の満足度、職員との会話量、職員の理解度、刑務所の規律厳格度、他の受刑者との関係について、それぞれ5件法で評定させた。

なお、上の①③④尺度の44項目の質問は、回答に及ぼす項目間の影響を考え適宜分散して配列した。また、第1報告では①④⑦⑧尺度について検討し、残りの尺度については第2報告で論及する予定であるが、質問文は資料として論文末に掲載した。

IV 結果と考察

1 収容分類級による比較

YA級400名、YB級400名分の調査を依頼し、回収率は職員用調査票と受刑者用調査票どちらも100%であった。ただし、一部の項目の回答に欠損が存在していた。以下の集計結果の合計が必ずしも800名とならないのはそのためである。

職員用調査票で得られた項目について、収容分類級における犯罪傾向の進んでいないYA級と、犯罪傾向が進んでいるYB級について比較検討を行った。また、法務総合研究所による昭和50年当時の若年受刑者の資料をもとに、一部について比較検討を行った。

(1) 年齢

平均年齢ではYA級は23.12歳、YB級が23.36歳と差はみられないが、年齢構成はYA級とYB級では大きく異なっている。

図1-1は、YA級とYB級の2群により年齢構成をみたものである。年齢が上がるにしたがってYB級の比率が高くなるのは、刑務所入所2回目以降はYB級と判定されることが多いことによると考えられる。

(2) 施設歴

刑務所入所以前に受けた処分の状況を比較する。

少年院に入院した経験のある者は、YA級で15.0%、YB級で60.0%となっていた ($p < .01$)。同様に、少年鑑別所に入所した経験のある者が、YA級で38.0%、YB級で62.8% ($p < .01$)、一方、教護院歴を有する者ではYA級で2.5%、YB級では15.3% ($p < .01$)となっていた。なお、施設歴を有しない者はYA級で61.0%、YB級で23.5%であった ($p < .01$)。犯罪性の判定においては、過去の処分歴も勘案されているが、昭和50年の資料では、少年院歴を有する者がYA級で8.2%、YB級で67.2%となっており、当時と比べ、ややYA級において少年院歴を有する者が増

えている。

(3) 刑務所入所回数

Y A級においては調査対象となった全員が初入である。Y B級では刑務所初入者が78.2%，2度目の者が18.3%，3度目の者が3.3%であった(p<.01)。

昭和50年当時の資料では、Y B級において初入者が63.2%，2度目が28.2%，3度目が7.2%となっており、当時と比べると、Y B級において初入の比率が高くなっている。

(4) 暴力団・暴走族加入歴

暴力団については、Y A級では暴力団加入歴のない者が93.0%を占めていた。これに対し、Y B級では暴力団加入歴のない者は44%に過ぎず、加入中が25.8%，離脱済みの者が26.8%であった(p<.01)。犯罪性の判定にはこの点も考慮されている。

次に暴走族については、Y A級では、暴走族加入歴のない者が79.4%，また、暴走族離脱済みの者が19.6%であり、Y B級では加入歴のない者が66.1%，また、暴走族離脱済みの者が30.4%であった(p<.01)。

(5) 薬物乱用歴

有機溶剤・シンナーについて、Y A級は乱用歴のない者が51.8%，これに対しY B級は24.9%であった。また、常習者がY A級では

37.7%，Y B級が62.0%となっていた(p<.01)。覚せい剤については、Y A級は乱用歴のない者が64.3%，これに対しY B級は40.6%であった。また、常習者がY A級では29.4%，Y B級が48.4%となっていた(p<.01)。

(6) 罪種

表1-1は、罪種の構成について比較したものである。

Y A級の方がY B級よりも性犯、凶悪犯の比率が高く、粗暴犯が少なかった(p<.01)。

一方、昭和50年の資料では、Y A級は性犯、凶悪犯の比率が高い点は一致しているものの、当時に比べると、Y B級における窃盗犯の占める割合が減少している。

(7) 言渡し刑期

Y A級の言渡し刑期の平均は、35.47月(約2.9年)であるのに対し、Y B級は33.81月(約2.8年)であり、両群に大きな差はみられない。図1-2に示したように、なだらかな山形になっている。

(8) 本件共犯

Y A級の58.4%，Y B級の57.5%が本件に共犯を有しており、両群に大きな差は認められなかった。若年受刑者の特徴の1つとして共犯が多いことが挙げられる。

表1-1 収容分類級と罪種

罪種	収容分類級							
	Y A		<	Y B		合計		
	人員	%		人員	%	人員	%	
窃盗犯	95	24.1%		115	29.2%	210	26.6%	
粗暴犯	51	12.9%	<	82	20.8%	133	16.9%	
性犯	71	18.0%	>	25	6.3%	96	12.2%	
凶悪犯	63	15.9%	>	32	8.1%	95	12.0%	
交通犯	13	3.3%		8	2.0%	21	2.7%	
薬物犯	95	24.1%		116	29.4%	211	26.7%	
他刑法犯	4	1.0%		7	1.8%	11	1.4%	
他特別法犯	3	0.8%		9	2.3%	12	1.5%	
合計	395	100.0%		394	100.0%	789	100.0%	

$\chi^2=48.39$ p<.001 欠損値があるため人員の合計は800とならない。

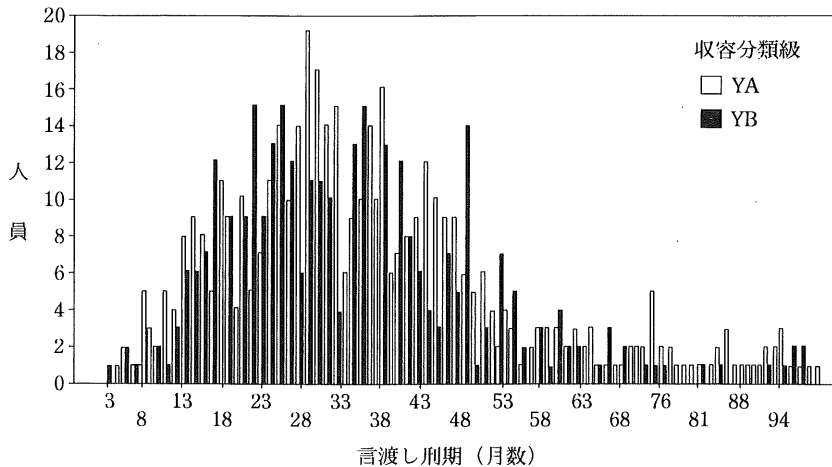


図1-2 収容分類級と言渡し刑期（月数）

(9) 保護関係

YA級が引受人有りが92.4%、無しが5.0%、未定が2.5%であるのに対して、YB級で引受人有りは79.9%、無しが10.6%、未定が9.5%であった。YB級の方が保護状況が悪かった ($p < .01$)。

(10) 配偶者

YA級は未婚者が80.1%、配偶者有りが11.6%、離婚が8.3%であるのに対し、YB級では、未婚者が69.1%、配偶者有りが20.1%、離婚が10.8%となっており、YA級の方が未婚者が多い ($p < .01$)。元来、YA級の年齢構成が若い者に偏っていることも影響していると考えられる。

(11) 知能

CAPAS能力検査によるIQ相当値の平均値を見ると、YA級は84.07、YB級が83.84であり、YA級とYB級に差は認められなかった。昭和50年の資料においてもYA級とYB級に知能の差は認められていない。

(12) 教育程度

表1-2は、教育程度について見たものである。YA級では中学卒業が36.5%、高校中退が43.5%、高校卒業が14.9%であるのに対し、YB級では中学卒業が67.4%、高校中退

が29.5%、高校卒業が2.8%であり、YA級の方が学歴が高いと言える ($p < .01$)。

(13) 入所前の職の有無

YA級では50.6%が職を有していたのに対し、YB級は75%が無職であり、顕著な差が認められた ($p < .01$)。

(14) 自殺企図歴

刑務所に収容される以前も含め、自殺企図歴を有する者はYA級で14名 (3.5%)、YB級で20名 (5.1%)であった。

(15) 法務省式人格目録 (MJPI)

表1-3は、法務省式人格目録 (MJPI) により、性格の各領域について検討したものである。なお、平成10年にMJPIの再標準化が行われ、今回の調査対象には改訂前と改訂後の両方が含まれている。本分析においては、先行研究との比較を配慮して改訂前のMJPIを受けた者に対象を限定した。

F検定の結果、有意差のあった項目は、13尺度中「虚構」「自信欠如」「不安定」「爆発」「自己顕示」「過活動」「偏狭」の7尺度であり、「虚構」と「自信欠如」についてはYA級の方が平均得点が高く、それ以外はYB級の方が平均得点が高かった。

なお、昭和50年の資料では「偏向」「心気

表 1-2 収容分類級と教育程度

		収容分類						
		YA		<	YB		合計	
		人員	%		人員	%	人員	%
教育程度	中卒	144	36.5%	<	267	67.4%	411	52.0%
	高校中退	172	43.5%	>	117	29.5%	289	36.5%
	高卒	59	14.9%	>	11	2.8%	70	8.8%
	高卒以上	20	5.1%	>	1	.3%	21	2.7%
	合計	395	100.0%		396	100.0%	791	100.0%

$\chi^2=97.38$ $p<.001$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

表 1-3 収容分類とMJPI

	収容分類級							
	YA		>	YB		合計		F 値
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
虚構	5.85	3.69	>	5.02	3.57	5.40	3.64	8.21 **
偏向	1.58	2.10		1.87	2.06	1.74	2.08	3.00
自我防衛	9.27	4.02		8.86	4.08	9.05	4.05	1.65
心気症	8.54	5.39		8.17	4.99	8.34	5.18	.77
自信欠如	8.60	5.67	>	7.36	5.43	7.94	5.57	7.75 **
抑うつ	6.25	5.12		6.53	5.00	6.40	5.05	.46
不安定	9.04	5.55	<	10.88	5.70	10.03	5.70	16.54 **
爆発	5.14	4.77	<	7.63	5.86	6.47	5.52	33.01 **
自己顕示	8.55	4.63	<	9.45	4.40	9.04	4.53	6.18 *
過活動	12.67	4.87	<	13.95	4.29	13.36	4.61	12.15 **
軽躁	14.33	4.79		14.36	4.68	14.35	4.73	.00
従属	10.29	5.04		10.45	4.87	10.37	4.95	.16
偏狭	6.16	4.39	<	7.25	4.13	6.74	4.28	10.15 **

改訂前MIPIの人員 YA=288 , YB=332

** p<.01 * p<.05

症」「抑うつ」「不安定」「爆発」「自己顕示」「過活動」「偏狭」の8尺度に有意差が見られており、すべてYB級の方が平均得点は高かったことが示されている。

(16) 懲罰の有無

刑務所内の成績を知る1つの手がかりとして、懲罰の有無について見ると、YA級では29.82%の者が懲罰を受けた経験があるが、YB級は55.5%の者が懲罰を受けたことがあり、顕著な差が認められた(p<.01)。

2 懲罰の有無による比較

次に、全調査対象者を懲罰を受けたことがある者となない者の2群に分けて両者を比較し、若年受刑者のどのような属性が懲罰に結びつきやすいかについて検討を行った。

これまでの分析が犯罪性の進度に関わる分析であったとすれば、この比較は、刑務所内での秩序維持に資する検討である。

(1) 少年院入院歴

少年院入院歴がない者で、懲罰の経験があるのは32.3%であったのに対し、少年院入院歴がある場合では42.6%が懲罰の経験があり、有意差が認められた(p<.01)。

(2) 暴力団・暴走族加入歴

表2-1は、暴力団加入歴と懲罰との関連を見たものである。

懲罰なし群の方が、暴力団加入歴がない者が多く、また、懲罰あり群の方が、暴力団に加入中もしくは離脱済みの者が多かった(p<.01)。

表2-1 懲罰の有無と暴力団所属歴

		懲罰の有無				合計		
		なし		あり		人員	%	
		人員	%	人員	%			
暴力団	なし	347	75.8%	>	200	58.7%	547	68.5%
	加入中	51	11.1%	<	54	15.8%	105	13.1%
	離脱済	50	10.9%	<	82	24.0%	132	16.5%
	不明	10	2.2%		5	1.5%	15	1.9%
	合計	458	100.0%		341	100.0%	799	100.0%

 $x^2=32.58$ $p<.001$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

表2-2 懲罰の有無と薬物乱用歴

懲罰の有無と有機溶剤・シンナー乱用歴

		懲罰の有無				合計		
		なし		あり		人員	%	
		人員	%	人員	%			
シンナー歴	なし	198	44.2%	>	102	30.2%	300	38.2%
	数度内	57	12.7%		36	10.7%	93	11.8%
	常習	193	43.1%	<	200	59.2%	393	50.0%
	合計	448	100.0%		338	100.0%	786	100.0%

 $x^2=20.60$ $p<.001$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

懲罰の有無と覚せい剤乱用歴

		懲罰の有無				合計		
		なし		あり		人員	%	
		人員	%	人員	%			
覚せい剤歴	なし	259	57.3%	>	155	45.7%	414	52.3%
	数度内	31	6.9%	<	38	11.2%	69	8.7%
	常習	162	35.8%	<	146	43.1%	308	38.9%
	合計	452	100.0%		339	100.0%	791	100.0%

 $x^2=11.76$ $p<.01$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

表2-3 懲罰の有無と罪種

		懲罰の有無				合計		
		なし		あり		人員	%	
		人員	%	人員	%			
罪種	窃盗犯	125	27.8%		85	25.1%	210	26.6%
	粗暴犯	66	14.7%	<	67	19.8%	133	16.9%
	性犯罪	66	14.7%	>	30	8.8%	96	12.2%
	凶悪犯	52	11.6%		43	12.7%	95	12.1%
	交通犯	16	3.6%	>	4	1.2%	20	2.5%
	薬物犯	108	24.1%	<	103	30.4%	211	26.8%
	他刑法犯	8	1.8%		3	.9%	11	1.4%
	他特別犯	8	1.8%		4	1.2%	12	1.5%
	合計	449	100.0%		339	100.0%	788	100.0%

 $x^2=17.89$ $p<.05$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

(3) 薬物乱用歴

表2-2は、薬物乱用歴と懲罰との関連をみたものである。

有機溶剤・シンナー乱用歴、覚せい剤乱用歴いずれにおいても、懲罰あり群の方が、乱用歴が多かった(p<.01)。

(4) 罪種

表2-3は、罪種と懲罰との関連を見たものである。懲罰なし群とあり群で罪種の構成比を比較したところ差が認められ、懲罰あり群の方が粗暴犯と薬物犯の比率が高く、性犯と交通犯の比率が低かった。

(5) 教育程度

表2-4に示したように、懲罰あり群の方が学歴が低かった(p<.05)。

(6) 入所前の職の有無

懲罰なし群は41.1%の者が職を有していたが、懲罰あり群は33.6%の者が職を有していたにすぎず、群間に差が認められた(p<.05)。

(7) 法務省式人格目録 (MJPI)

表2-5は、MJPIの各下位項目について、懲罰あり群となし群の平均値を比較したものである。

「抑うつ」「不安定」「爆発」「自己顕示」「過活動」「偏狭」で有意差が認められ、いずれも、懲罰あり群の方が得点が高かった。

(8) その他

本件共犯、保護関係、配偶者、知能につい

て同様の検討をしたが、懲罰の有無による2群の比率においては、統計的に有意な差は認められなかった。

(9) 収容分類級の影響

前述したように、YA級よりもYB級の方が懲罰を有する者の比率が高い。これは犯罪傾向が進んでいるYB級の方が処遇困難であり、YA級とYB級では施設風土や処遇の様態が異なっていることにもよる。そこで、収容分類級の影響を除くため、YA級、YB級それぞれについて同様の分析を行ったところ、懲罰の有無との関連が認められた属性は、暴力団加入歴があること、MJPIにおいて「不安定」「爆発」「偏狭」が高いこと、薬物乱用歴があること、であった。これらは処遇上の問題発生の予測に役立ち得る指標と考えられる。

3 若年受刑者の時間的展望

これまでの分析は、いずれも刑務所職員に依頼した職員用調査票の集計結果に基づいた分析であった。次に受刑者用調査票の集計結果をもとに、若年受刑者の心理特性についての分析を行う。人には、将来の幸福のためには、たとえ今は苦勞をしても、それに耐えて粘っていくという者がいれば、他方、出たとこ勝負で成り行き任せのせつな主義的な者がいる。こうした個人特性の差異に関する若年受刑者の時間的展望に注目した。

表2-4 懲罰の有無と教育程度

		懲罰の有無						
		なし		あり		合計		
		人員	%		人員	%	人員	%
教育程度	中卒	215	47.6%	<	196	58.0%	411	52.0%
	高校中退	170	37.6%		119	35.2%	289	36.6%
	高卒	52	11.5%		17	5.0%	69	8.7%
	高卒以上	15	3.3%	>	6	1.8%	21	2.7%
	合計	452	100.0%		338	100.0%	790	100.0%

$\chi^2=15.36$ $p<.01$

欠損値があるため、人員の合計は800とはならない。

表2-5 懲罰の有無とMJPI

	懲罰の有無							F 値
	なし		あり		合計			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
虚構	5.64	3.79	5.15	3.48	5.40	3.64	2.81	
偏向	1.65	2.12	1.83	2.04	1.74	2.08	1.14	
自我防衛	9.36	4.04	8.73	4.05	9.05	4.05	3.80	
心気症	8.13	5.25	8.56	5.11	8.34	5.18	1.10	
自信欠如	7.81	5.50	8.06	5.65	7.94	5.57	.31	
抑うつ	6.00	4.87	<	6.81	5.21	6.40	5.05	4.06 *
不安定	9.31	5.67	<	10.77	5.66	10.03	5.70	10.29 **
爆発	5.64	5.26	<	7.32	5.67	6.47	5.52	14.60 **
自己顕示	8.69	4.65	<	9.40	4.37	9.04	4.53	3.84 *
過活動	12.84	4.79	<	13.89	4.35	13.36	4.61	7.99 **
軽躁	14.47	4.39		14.22	5.05	14.35	4.73	.42
従属	10.07	5.05		10.69	4.82	10.37	4.95	2.43
偏狭	6.15	4.41	<	7.35	4.06	6.74	4.28	12.29 **

改訂前MJPIの人員 YA=288 , YB=332

** p < .01 * p < .05

表3-1 未来考慮尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
8 私は先のことはその時になって考えればいいので、今を大切にしたい	0.708	-0.076	-0.189
10 先のことはよくわからないので、考えても仕方がない	0.616	-0.143	-0.322
9 私は先のことよりも今を大切に生きています	0.539	-0.020	-0.122
14 私はもし問題が起こっても困ったことになる前になんとかかなんと思っているので先のことは気にしない	0.523	-0.220	-0.097
12 あまり勉強しなくても、将来なんとかやっつけていける	0.373	-0.312	-0.03
2 私は普段から今やろうとしていることが将来の自分のためになるかどうかをよく考えながら生活している	-0.032	0.577	0.337
4 将来の進学や就職のことを考えて、遊ぶのを我慢して勉強するほうだ	-0.130	0.567	0.080
1 私は結果が出るまで何年もかかることのために、日ごろから特別な努力をつけている	-0.101	0.548	0.274
13 私はすばらしいものに飛びつくのも早いがあきるのも早い(逆転)	0.336	-0.425	0.216
11 先々よい結果をうまいだろうと分かっているけど、その時々結果欲しさで勝手な行動をしやすい(逆転)	0.323	-0.389	0.171
7 私は将来成功するためなら今の喜びや幸福を我慢する	-0.059	0.327	0.233
6 将来のことをあれこれ空想するのが好きである	-0.141	0.004	0.706
3 先の計画をたてるのが好きである	-0.185	0.264	0.598
5 私は今よりも先のことを考えるようにしたいと思っている	-0.080	0.076	0.332

(1) 時間的展望の構造的理解

若年受刑者の時間的展望の特徴を検討するため、未来考慮尺度を用いた。

まず、未来考慮尺度14項目の構造をみるため因子分析を行った。その結果、YA級、YB級ともほぼ同様の因子構造であったため、最終的にYA級とYB級を統合したデータに基づいて分析し、3因子を抽出した(表3-

1)。

第1因子は“私は先のことよりも今を大切に生きています”などの項目に因子負荷量が高く、「現在優位」と命名した。

第2因子は“将来の進学や就職のことを考えて、遊ぶのを我慢して勉強するほうだ”などの項目に因子負荷量が高く、「建設的未来優位」と命名した。

第3因子は“将来のことをあれこれ空想するのが好きである”などの項目に因子負荷量が高く、「空想的未来優位」と命名した。

先行研究では、「未来志向と現実志向」あるいは「先見的とせつな的」といった2因子が想定される場合が多く、本研究でも「現在優位」と「未来優位」の大別はあるものの、「未来優位」がさらに「建設的…」と「空想的…」に分かれ、3因子構造となった。

（なお、因子分析過程の詳細は備考の注3を参照されたい。）

(2) 未来考慮尺度とローカス・オブ・コントロール

「物事の生起に関与する要因が不確実な場合、結果をコントロールする期待が自分の側に向けられていて、自分の能力や努力によって可能であると思いつく場合と、自分以外の何者かの力によって可能になると信じる場合がある。つまり成果を生み出す力が自分にあると期待するか、それとも自分以外の外部の力にあると期待するかという問題である。前者の傾向の人は内的統制型、後者の傾向の人は外的統制型と呼ばれる。これはロッター（Rotter, J. B., 1966）によって広められた概念であり、『ローカス・オブ・コントロール』

と呼ばれる」（引用：水口, 1993）。

自分の行動と未来の成果との結びつきを認知している内的統制の強い者は、自分が努力することで、より良い未来が得られると信じ、綿密な計画を立て、目標に対して主体的に取り組む。他方、外的統制が強い者は、自分の行為が将来と結びついているとは考えず、自分の願望を達成するかどうかは運次第として、せつな的な日々を送るであろう。時間的展望とローカス・オブ・コントロールは相互に関連していると考えられる（杉山, 1994）。

こうした未来考慮尺度とローカス・オブ・コントロール尺度（注4）との関係を検討する。

ローカス・オブ・コントロール尺度の合計得点の高低によって全対象者を4群に分割し、一元配置分散分析によって未来考慮尺度の各因子の平均値を比較した（表3-2）。

未来考慮尺度の第1因子である「現在優位」は、内的統制の4群間に有意差が認められた（ $F=60.76, p<.01$ ）。そこで、多重比較（LSD法）を実施した結果、内的統制の高群<中高群<中低群<低群の順で現在優位が高いことが明らかとなった。

表3-2 未来考慮尺度とローカス・オブ・コントロール(LOC)

	LOC	人員	平均値	標準偏差	多重比較	F値, P値
現在優位	① 低群	203	15.56	4.00	>②③④	F=56.901
	② 低中群	191	14.05	3.46	<①, >③④	
	③ 中高群	186	12.47	3.46	<①②, >④	p<.01
	④ 高群	195	10.88	3.58	<①②③	
建設的未来優位	① 低群	203	14.75	3.76	>②③④	F=42.757
	② 低中群	192	16.77	3.70	<①, >③④	
	③ 中高群	189	17.19	3.73	<①②, >④	p<.01
	④ 高群	192	19.29	4.31	<①②③	
空想的未来優位	① 低群	203	10.40	2.51	>②③④	F=13.363
	② 低中群	193	10.91	2.49	<①, >④	
	③ 中高群	189	11.23	2.26	<①, >④	p<.01
	④ 高群	193	11.95	2.26	<①②③	

表3-3 未来考慮尺度と自尊感情

		自尊感情	人員	平均値	標準偏差	多重比較	F値, P値
現在優位	①	低群	224	13.04	4.30		F=1.94
	②	低中群	180	12.92	3.66		
	③	中高群	205	13.34	3.96		p=.12
	④	高群	167	13.88	4.20		
建設的未來優位	①	低群	221	17.95	4.32	>③④	F=10.45
	②	低中群	181	17.39	3.94	>④	
	③	中高群	207	16.59	3.92	<①, >④	p<.01
	④	高群	168	16.98	4.31	<①②③	
空想的未來優位	①	低群	222	11.30	2.30		F=.86
	②	低中群	182	11.11	2.29		
	③	中高群	206	10.94	2.46		p=.46
	④	高群	170	11.01	2.71		

表4-1 収容分類級と時間的展望

	収容分類級				F	p
	YA		YB			
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
現在優位	13.01	4.02	13.51	4.09	F=3.03	p=.82
建設的未來優位	17.35	4.04	16.60	4.29	F=6.46	p<.01
空想的未來優位	11.25	2.40	10.97	2.53	F=2.40	p=.12

また、第2因子の「建設的未來優位」も、内的統制の4群間に有意差が認められた(F=45.33, p<.01)。多重比較の結果、内的統制の高群>中高群>中低群>低群の順で建設的未來優位が高いことが明らかとなった。

第3因子の「空想的未來優位」も、内的統制の4群間に有意差が認められた(F=14.63, p<.01)。多重比較の結果、内的統制の高群>中高群・中低群>低群の順で空想的未來優位が高いことが明らかとなった。

すなわち、現在優位が強ければ強いほど外的統制が強く、逆に、未來優位が強い場合には内的統制が強かった。従来のは仮説は若年受刑者においても当てはまると言える。

(3) 未来考慮尺度と自尊感情

自負心、誇り、自尊心といった自分自身の価値付けを示す自尊感情の強さは、将来の目標のために満足を遅延する傾向と関連していると考えられている(白井, 1997)。

そこで、未来考慮尺度と自尊感情尺度(注

5)との関連を検討するために自尊感情の得点により4群に分け、分散分析を行った(表3-3)。

その結果、「建設的未來優位」にのみ有意差が認められ(F=10.44, p<.01)、自尊感情高群>中高群>中低群>低群の順に建設的未來優位得点が高かった。すなわち、自尊感情の強さは建設的未來優位と関連があることが明らかとなった。

4 若年受刑者の属性と時間的展望

次に、こうした時間的展望が若年受刑者の諸属性とどのように関わっているかについて検討を行う。

(1) 収容分類級と時間的展望

まず、収容分類級により、若年受刑者を犯罪傾向が進んでいないYA級と、犯罪傾向が進んでいるYB級の2群に分け、未来考慮尺度の下位カテゴリーの平均値を比較した(表4-1)。

その結果、収容分類級においては、「建設

「建設的未来優位」にのみ有意差が認められ ($F=64.61, p<.01$)、YA級の方がYB級よりも「建設的未来優位」の得点が高かった。

従来から、目標のために満足を遅延することは肯定的に評価されることが多く、犯罪性が進んでいると考えられるYB級よりも、YA級の方が「建設的未来優位」が高いという結果は、こうした時間的展望に関する一般の見解と一致している。

ただし、同じ「未来優位」であっても、「空想的未来優位」については、YA級とYB級で有意差が見られなかった。

(2) 少年院歴による時間的展望の比較

前述のように、本調査の対象者の37.5%が過去に非行によって少年院に在院していたことがある。こうした者は成人する以前から逸脱行動に及んでいたわけであり、犯罪性を検討する際の1つの目安となると考えられる。そこで、少年院在院歴の有無により、未来考慮尺度の下位カテゴリーの平均値を比較することとした。なお、収容分類級の影響を考慮し、少年院歴の有無×収容分類級の2要因分散分析を実施した。

その結果、「建設的未来優位」のみ有意差が認められ ($F=7.18, p<.01$)、少年院歴を有する群の方が、「建設的未来優位」得点が低かった (図4-1)。なお、収容分類級による差は認められなかった。

(3) 懲罰の有無と時間的展望

懲罰の有無と時間的展望の関連について検討する。なお、前述のように収容分類級の影響を考慮し、懲罰の有無×収容分類級の2要因の分散分析を実施した。

「現在優位」は、懲罰の有無、収容分類級とも有意差は認められなかった。

「建設的未来優位」は、収容分類級でのみ有意差が認められ ($F=4.61, p<.05$)、YA級の平均得点が高かった。

建設的未来優位がYA級に高いのは前述したとおりである。

「空想的未来優位」は、懲罰の有無にのみ有意差が認められ ($F=4.19, p<.05$)、懲罰あり群の平均得点が高かった (図4-2)。

若年受刑者においては、単に空想したり計画するにとどまる未来優位は必ずしも肯定的な意味合いを持たず、むしろ現実からの逃避的な夢を意味していることが考えられる。

(4) 年齢と時間的展望

時間的展望は比較的安定した個人の特性とする説と、加齢や人生の転機などによって変化するとする説がある。

そこで、この点を明らかにするため、年齢×収容分類級の2要因分散分析を実施した。その結果、年齢による差は認められなかった。

(5) 時間的展望の変容可能性

Landun(1976)は、少年院在院中の非行少年の時間的展望の変容を観察した結果、入院した直後は、環境変化のショックに対応することを求められるために現在優位になり、出院が近づくとも未来に関する思考が増加することを見出している。そして、Landunは、従来から言われていた一般少年に比べて非行少年の方が現在優先的であるという説は、単に施設入院中という状況要因に過ぎなかった可能性があるとしている。

時間的展望のタイプは比較的安定した個人特性と考えるのが定説であるが、ほとんどの受刑者が刑務所を出所する日を待ち望んでおり、出所間近になれば、どのような受刑者であっても未来に向くというのも考えられないことではない。むしろ、単に未来に思いをはせたからといって、現在優位か未来優位かという時間的展望のタイプまで変容するとは限らない。この点を明らかにするため、本研究では次のような分析を行った。

受刑者が刑務所出所の日が近くなったのを知るのは、仮釈放のための委員面接を受けたか、また、その順番が来たことを知ったときである。そこで、仮釈放申請に係る委員面接又は仮釈放準備調査の実施状況を調査し、実

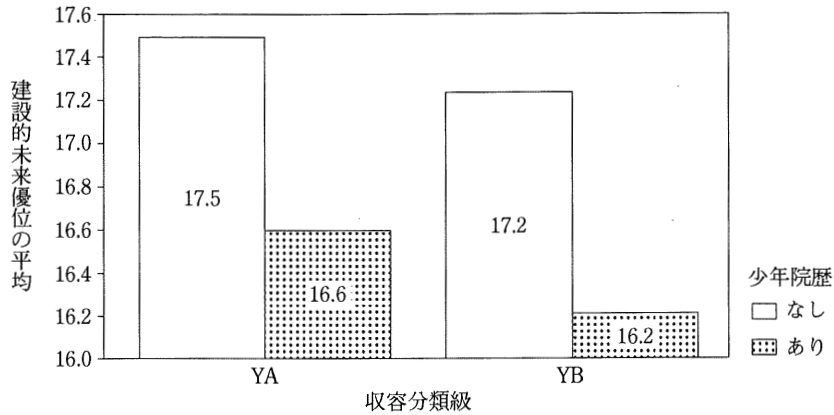


図4-1 少年院入院歴と時間的展望

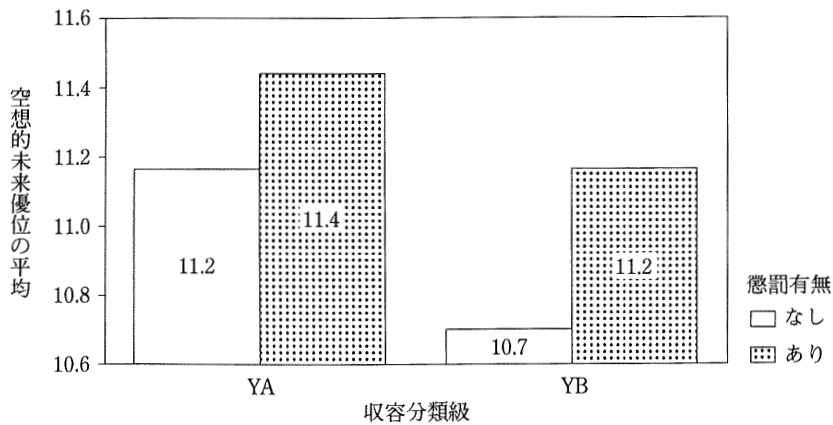


図4-2 懲罰の有無と時間的展望

施済（含む実施予定日告知済）と未実施の2群に分けて、未来考慮尺度の下位カテゴリーの平均値を比較することとした。なお、収容分類級の影響を考慮し、面接有無×収容分類級の2要因分散分析を実施した（表4-2）。

分析の結果、「現在優位」「建設的未來優位」「空想的未來優位」のいずれにおいても有意差は認められなかった。

時間的展望は出所間近かどうかといった程度では変化せず、やはり、時間的展望は比較的安定した個人の特性と考えた方が妥当とい

える。なお、可塑性の面で若年受刑者は少年と異なっており、この点については今後の研究を待たねばならない。

(6) 出所後の進路決定と時間的展望

進路決定（2群）×収容分類級（2群）の2要因分散分析を行った（図4-3）。

分析の結果、「現在優位」「建設的未來優位」「空想的未來優位」は、いずれも進路決定の有無によって有意差が認められ、収容分類級による差は認められなかった。

「決めている」と回答した者は、「現在優位」

表4-2 仮釈放面接と時間的展望

収容分類級	仮釈放面接	平均値	標準偏差	人員
現	YA 済み	13.22	3.73	102
	未実施	12.91	4.12	294
	小計	12.99	4.02	396
在	YB 済み	12.69	3.74	59
	未実施	13.51	4.12	306
	小計	13.38	4.07	365
優	済み	13.03	3.73	161
	未実施	13.22	4.13	600
	総和	13.18	4.04	761

F=1.42 p=.24

収容分類級	仮釈放面接	平均値	標準偏差	人員
建設	YA 済み	16.82	3.94	102
	未実施	17.54	4.06	293
	小計	17.35	4.04	395
未	YB 済み	16.60	4.66	58
	未実施	16.68	4.26	308
	小計	16.66	4.32	366
優	済み	16.74	4.20	160
	未実施	17.10	4.18	601
	総和	17.02	4.19	761

F=2.47 p=.06

収容分類級	仮釈放面接	平均値	標準偏差	人員
空	YA 済み	11.18	2.15	100
	未実施	11.27	2.47	294
	小計	11.25	2.39	394
未	YB 済み	11.49	2.74	59
	未実施	10.97	2.44	310
	小計	11.05	2.49	369
優	済み	11.29	2.38	159
	未実施	11.12	2.46	604
	総和	11.15	2.44	763

F=1.21 p=.30

の得点が低く (F=15.38, p<.01), 逆に「空想的未来優位」(F=22.34, p<.01) と「建設的未来優位」(F=11.53, p<.01) の得点が高かった。

すなわち、収容分類級の違いによらず、現在優位の高い者ほど、将来の進路は定まっておらず、未来優位の高い者ほど、進路が定まっているといえる。

出所後に安定した職業生活を送ることが再犯予防にとって重要な因子といわれているだ

けに、出所後の進路決定を促す個人要因を把握することには意義があると思われる。

なお、時間的展望と進路決定に関する先行研究としては、都筑(1998)による大学生の卒業後の進路の決定・未決定と時間的展望の関連についての研究がある。都筑は、サークル・テスト(Cottle, 1967)によって大学生の時間的展望を測定し、卒業後の進路が決定している群は未決定群よりも「未来優位」が多く、未決定群は決定群よりも「現在優位」が多いことを見出している。

(7) 働く目的と時間的展望

働く目的をどのようにとらえているかということも、受刑者の特性を理解する上で重要なことと思われる。

働く目的について、「お金をかせぐため(金目的)」「社会人としての義務を果たすため(社会人義務)」「仕事を通じて自分をいかすため(自己実現)」の3つの選択肢ごとに未来考慮尺度の下位尺度の平均値を比較した。ただし、収容分類級の影響を考慮し、働く目的×収容分類級の2要因分散分析を実施した(図4-4)。

分析の結果、「現在優位」「建設的未来優位」「空想的未来優位」は、いずれも働く目的の3群による差が有意であり、収容分類級による差は認められなかった。

「現在優位」は、金目的とする者の方が、「自己実現」のためとする者に比べ、得点が有意に高かった (F=7.80, p<.01)。

「建設的未来優位」は、「自己実現」>「社会人義務」>「金目的」の順で建設的未来優位得点が高かった (F=34.07, p<.01)。

「空想的未来優位」は、「自己実現」と回答した者の方が、「金目的」と回答した者よりも、空想的未来優位得点が高かった (F=3.665, p<.05)。

すなわち、収容分類級の違いによらず、働く目的を金のためと答えている者は、現在優位が高く、自己実現のためと答えている者は、

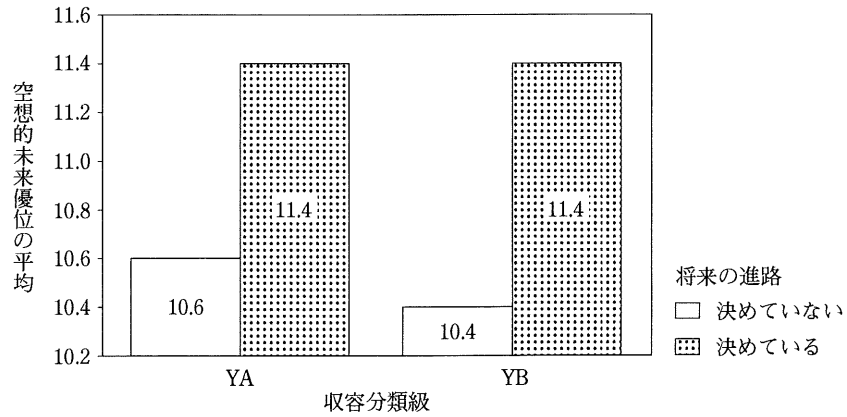
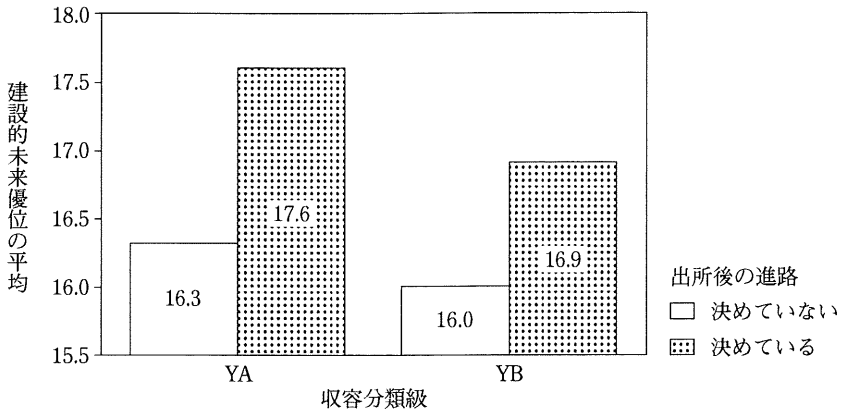
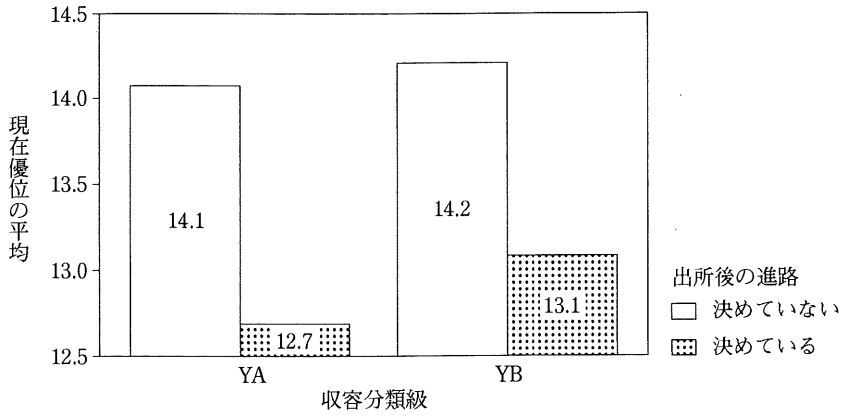


図4-3 出所後の進路決定と時間的展望

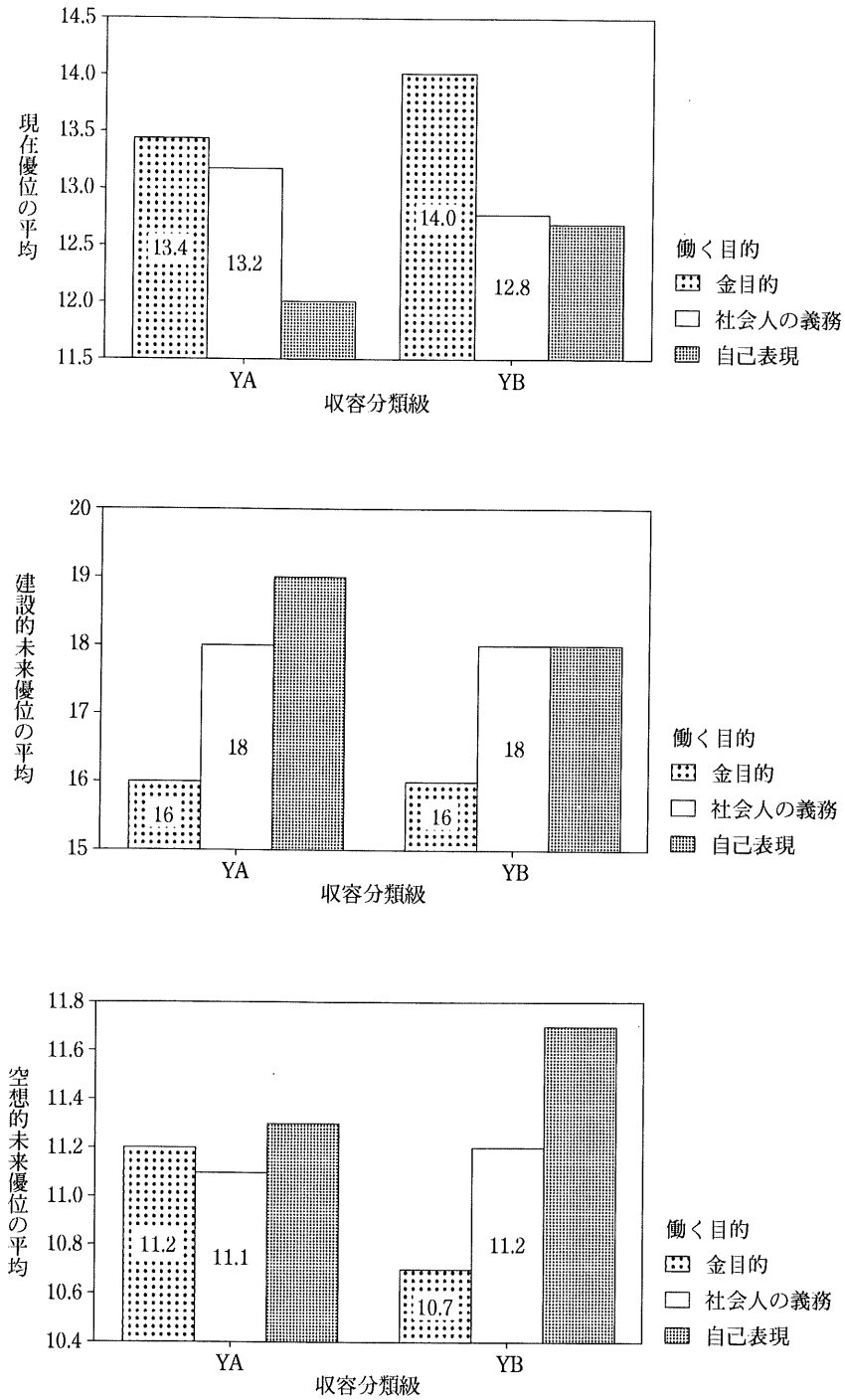


図4-4 働く目的と時間的展望

未来優位が高いといえる。

(8) 知能と時間的展望

知的能力は、将来を見とおす力と関連があると考えられるため、未来考慮尺度の各下位カテゴリーとIQとの相関を算出したところ、「現在優位」にのみ、弱い負の相関が認められた。すなわち、知能が低いほど、「現在優位」の得点が高かった。

「現在優位」 $r = -0.191^{**}$

「建設的未来優位」 $r = 0.026$

「空想的未来優位」 $r = 0.044$

$**p < .01$

Alan (1994)は、未来考慮尺度において現在優位の人が、本当に未来よりも現在を優先すべきと考えているかという点には疑問があるとし、抽象化能力の影響を考慮する必要があるとしている。知的な能力に限界があつて抽象的な将来について考慮することができないために、結果的に現在優位になっている者も含まれていると考えられるためである。

時間的展望のタイプの違いは、前述のローカス・オブ・コントロールをはじめとして、様々な要素から複合的に生じていると考えられるが、知的能力の違いもこうした時間的展望の違いに影響を与えていると考えられる。

(9) 罪種による時間的展望の比較

罪種の違いにより、時間的展望に特徴があるかどうかについて検討を行うため、罪種別に未来考慮の3つの下位カテゴリーの平均値を比較した。しかし、有意差は認められなかった。

5 若年受刑者の時間的展望(まとめ)

犯罪傾向が進んでいないYA級と、犯罪傾向が進んでいるYB級の時間的展望を比較したところ、YA級の方が、建設的未来優位の得点が高かった。また、少年院入院歴の有無により、時間的展望を比較したところ、少年院歴を有しない者の方が、建設的未来優位の得点が高かった。

さらに、懲罰の有無によって時間的展望を

比較したところ、懲罰あり群の方が空想的未来優位の得点が高かった。

従来から将来の目標のために満足を遅延することは、肯定的に評価されることが多く、逆にせつなものであることは否定的に評価されることが多かったが、「建設的未来優位」が乏しいことが、犯罪性と結びついている可能性が示唆された。

一方、同じ未来優位でありながら、「空想的未来優位」については、刑務所適応の点からは、肯定的に評価できないことがわかった。単に将来を空想したり、計画するにとどまる未来優位は、むしろ、現実からの逃避的な夢想傾向を意味しているのかもしれない。

したがって、若年受刑者の時間的展望を検討する際には、これら2つの未来優位の質的な違いを区別して考える必要があるといえる。

次に、時間的展望の安定性について検討を行った。時間的展望は比較的安定した個人の性格特性と考えられる一方、加齢や人生の転機、施設収容などを契機として変化するという説もある。この点について明らかにするために、年齢や刑務所出所間近の者とそうでない者で時間的展望を比較した有意差は認められず、やはり時間的展望は安定した心理特性と考えられる。

さらに、出所後の進路決定や働く目的の考え方の違いについて時間的展望を軸に検討したところ、未来優位が高い者は、出所後の進路を決定しており、逆に、現在優位が高い者は、進路を決定していなかった。また、働く目的を金とする者は現在優位が高く、自己実現のためとするものは未来優位が高かった。出所後の生活設計においても、時間的展望が影響を与えていることが明かとなった。

<引用文献・参考文献>

Alan Strathman, Faith Gleicher, David S. Boninger, and C. Scoot Edwards 1994 "The Consideration of Future Consequence:

- Weighing Immediate and Distant Outcomes of Behavior” Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 6. No. 4. 742-752
- 瀧上康幸・出口保行 1995 「CFC尺度を用いた非行少年の行動傾向についての一考察(1)」 犯罪心理学研究第33巻特別号 142 - 143
- 法務総合研究所紀要19号, 20号, 21号
- 平田光史・嶋田博・三好隆行・屋崎英典 1984 YB級施設における暴力団関係者の特性について
- 勝俣英史・篠原弘章・井上みどり 1982 「非行少年の時間的展望—少年鑑別所収容少年の場合」 熊本大学教育紀要人文科学第31号, 267 - 277
- 金子幾之輔・永井君子・高田明子・寺崎武彦・浦田洋 1985 若年受刑者の再犯過程に関する研究 犯罪心理学研究23巻特別号 102 - 103
- 片倉庸介・長谷川宜志・瀧上康幸・松村猛・水上好久・中勢直之・門本泉 1998 外国人受刑者の受刑態度に関する研究(その1) 中央研究所紀要第8号 11-40
- 河合弘靖 1993 最近の若年受刑者の特質について 矯正教育研究38巻 129-134
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討」教育心理学研究第30巻 302 - 307
- 小島賢一 1982 若年受刑者の学力について - その特徴 - 犯罪心理学研究19巻特別号 13 - 14
- 水口禮治 1993 適応と社会心理学的心理療法—コントロール・トレーニングの理論と技法 駿河台出版社
- 宮戸美樹・上野行良 1996 「ユーモアの支援的効果の検討—支援的ユーモア志向尺度の構成—」 心理学研究第57巻第4号 270 - 277
- 大川力・瀧上康幸・門本泉 1998 非行少年の自己意識に関する研究(その1) 中央研究所紀要8号 63-78
- 尾上一水・瓦井保・高橋介・阿南 武士 1979 YB級受刑者の不良傾向について 矯正教育30巻4号 57 - 60
- 杉山成 1994 「中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性」 教育心理学研究第42巻第4号 415 - 420
- 白井利明 1989 「現代青年の時間的展望の構造(1)—大学生と専門学校生を対象に—」 大阪教育大学紀要(第IV部門) 38巻 21 - 28
- 白井利明 1991 「青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連」 心理学研究第62巻第4号 260-263
- 白井利明 1993 「時間的信念尺度の検討に関する研究」 大阪教育大学紀要(第IV部門)42巻 51 - 57
- 白井利明 1997 「時間的展望の生涯発達心理学」 劉草書房
- 総務庁青少年対策本部 1998 「日本の青少年の生活と意識—青少年の生活と意識に関する基礎調査報告書—
- 竹田収 1987 若年受刑者の従属・同調性について 犯罪心理学研究25巻特別号 114-116
- 都筑学 1998 大学生の卒業後の進路の決定・未決定と時間的展望 日本心理学会大会論文集 P48
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 土屋 守・山下武子・竹石正博・久保貢・竹田収 1985 若年受刑者のヤクザ観について 犯罪心理学研究23巻特別号 100 - 101
- 浦田洋・中川猛・土屋守・永井君子・吉田研一郎 1986 受刑に対する受け止め方について - 初犯若年受刑者を対象として - 犯罪心理学研究24巻特別号 124 - 125

＜備考欄＞

注1：展望とは、辞書的には景色や物事などを広く見渡すことである。時間的な展望は今在る自分を基盤に時間的に離れた将来について、省察したり洞察したりして見渡すことであり、人の起こした行動を理解したり、これから起こすであろう行動を予測する上で重要な概念とされる(松田他, 1996)。ただし、心理学における時間的展望の概念はかなり拡張されており、単にパースペクティブ(展望)に留まらなくなっている。白井(1994)は、時間的展望をさらに4つの下位概念(狭義の時間的展望, 時間的態度, 時間的指向性, 狭義の時間知覚)に分類しているが、本研究でいうところの時間的展望は、この時間的指向性(time orientation)に該当する。

本研究で採用した未来考慮は、Alan(1994)のConsideration Future Consequencesの概念によるものである。

注2：階層非比例標本抽出法は、サンプル全体の中で各層の対象者の占める割合が、母集団に対するその層の比に必ずしも等しくせずに抽出する方法である。この方法は、関心のある調査対象者の数が相対的に少ないときに有効とされる。

注3：未来考慮尺度14項目について、「そのとおり」を5点、「ちがう」を1点として集計した。平均±1標準偏差の値が得点範囲(1点から5点)を超える不良項目は存在しなかったため、すべての項目を因子分析に持ち込んだ。共通性の初期値を1とし主因子法バリマックス回転によって3因子を抽出した。 α 信頼性係数は、第1因子のが0.726、第2因子が0.653、第3因子が0.566であった。

注4：ローカス・オブ・コントロール尺度の全項目の α 係数は0.725であった。

注5：自尊感情尺度を因子分析したところ、項目8の「もっと自分を尊敬できるようになりたい」のみが第1因子から除外され、 α 係数についても、この項目を除外した場合の方が高かった。大川他(1998)の少年鑑別所所在所少年を対象とした研究においても、同様の理由から、この項目を除外し、9項目の合計を自尊感情得点としており、本研究においても9項目の合計を自尊感情得点とすることとした。なお、9項目の時の α 係数は、0.834であった。

整理番号

C A R I C ちょうさ 調査

これは、みなさんが日ごろ生活の中で、どのように感じたり、考えたりしているかについての調査です。次のページから質問がありますが、人それぞれ、みんな考え方は違うので、どの答えが正しいとか、間違っているということはありません。また、この結果は、全員の分をまとめて取り扱いますので、名前を書く必要はありません。みなさんの行刑成績とも関係がありませんから、思ったまま、感じたままを教えてください。

答え方

質問では、あてはまる答えを選んで○印を付けたり、自分の考えに近い順番に番号をつけていきます。下の例にならって答えを書いてください。

例1) あなたの考えに一番近いものを選んでください。

- ア: スポーツではサッカーが好きだ。
- イ: スポーツでは野球が好きだ。
- ウ: スポーツではテニスが好きだ。

「サッカーが好きだ。」があなたに一番ピッタリくるときは、ここに○をつけます。

例2) あなたの意見に一番近いものを選んでください。

日本のサッカーは、いつか世界で一番強くなると思う。

- | | | | | |
|-------|---------|---------|-------|-----|
| そのとおり | まあそのとおり | どちらでもない | ややちがう | ちがう |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

「そのとおり」が一番あなたの考えに近いときは、ここに○をつけます。

質問1 あなたの性別は？ (男・女)

質問2 あなたの年齢は？ (歳)

質問3 次に書いてあることは、今のあなたやあなたの考えていることとどれくらい近いのですか？ 「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5つの中から、あなたの考えに合っているものを選んで○印をつけてください。

		とてもあてはまる	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	まったくあてはまらない
1	最近、私は体の調子が良い。	5	4	3	2	1
2	私は刑務所での生活に満足している。	5	4	3	2	1
3	私は職員とよく話す。	5	4	3	2	1
4	職員は私のことをとてもよく理解している。	5	4	3	2	1
5	刑務所内の規律は厳しいと思う。	5	4	3	2	1
6	受刑者との仲が良い。	5	4	3	2	1

質問4 人が働くのはどんな目的だと思いますか。次の中から、あなたの気持ちに一番近いものを1つだけ選んで○印をつけてください。

ア：お金を稼ぐため。

イ：社会人としての義務を果たすため。

ウ：仕事を通じて自分をいかすため。

質問5 転職（仕事を変えること）について質問します。次の中から、あなたの考えに一番近いものを1つ選んで○印をつけてください。

ア：つらくても転職せず、一生一つの職場で働き続けるべきである。

イ：職場に強い不満があれば、転職することもしかたがない。

ウ：職場に不満があれば、転職する方がよい。

エ：自分の才能を生かすためには、積極的に転職する方がよい。

質問6 ^{しつもん} 次^{つぎ}に書いてあることは、今^{いま}のあなたやあなた^{あなた}の考^{かんが}えていることとどれくらい近^{ちか}いですか？ 「そのとおり」から「ちがう」までの5つの中^{なか}から、あなた^{あなた}の考^{かんが}えに合^あっているものを選^{えら}んで○印^{じるし}をつけてください。

		そのとおり	まあそのとおり	どうでもいえない	ややちがう	ちがう
1	何でも、なりゆきにまかせるのが一番だ。	5	4	3	2	1
2	どうなるかわからない先のことを考 ^{かんが} えても仕方がない。	5	4	3	2	1
3	私は、結果 ^{けつが} が出るまで何年 ^{なんねん} もかかることのために、日 ^ひ ごろから特別な努力 ^{とくべつなどりよく} を続けている。	5	4	3	2	1
4	努力 ^{どりよく} すれば、りっぱな人間 ^{にんげん} になれる。	5	4	3	2	1
5	無理 ^{むり} に（先の）見通 ^{みとお} しを持つ必要 ^{ひつよう} はない。	5	4	3	2	1
6	私は普段 ^{ふだん} から今 ^{いま} やろうとしていることが将来 ^{しょうらい} の自分 ^{じぶん} のためになるかどうかをよく考 ^{かんが} えながら生活 ^{せいかつ} している。	5	4	3	2	1
7	いっしょうけんめい話 ^{はな} せば、だれにでも、わかってもらえる。	5	4	3	2	1
8	将来 ^{しょうらい} のことをいろいろ考 ^{かんが} えて、それに縛 ^{しば} られるのは不自由 ^{ふじゆう} だ。	5	4	3	2	1
9	先 ^{さき} の計画 ^{けいかく} を立てるが好き ^す である。	5	4	3	2	1
10	私は自分 ^{じぶん} の人生 ^{じんせい} を、自分自身 ^{じぶんじしん} で決定 ^{けつてい} している。	5	4	3	2	1
11	それが将来 ^{しょうらい} に役立 ^{やくだ} つかどうかよりも、それをすることが楽 ^{たの} しいかどうかが大切 ^{たいせつ} だ。	5	4	3	2	1
12	将来 ^{しょうらい} の進学 ^{しんがく} や就職 ^{しゅうしょく} のことを考 ^{かんが} えて、遊ぶ ^{あそ} のを我慢 ^{がまん} して勉強 ^{べんきょう} する方 ^{ほう} だ。	5	4	3	2	1
13	人生 ^{じんせい} は、運命 ^{うんめい} によって決められている。	5	4	3	2	1
14	先 ^{さき} がわからなければ、わからないまま生 ^い きる道 ^{みち} はある。	5	4	3	2	1
15	私は、今 ^{いま} よりも先 ^{さき} のことを考 ^{かんが} えるようにしたいと思 ^{おも} って	5	4	3	2	1
16	今 ^{いま} が楽しければそれでよい。	5	4	3	2	1
17	将来 ^{しょうらい} のことをあれこれ空想 ^{くうそう} するのが好き ^す である。	5	4	3	2	1
18	幸福 ^{こうふく} になるか不幸 ^{ふこう} になるかは、偶然 ^{ぐうぜん} によって決 ^き まる。	5	4	3	2	1
19	生 ^い きている実感 ^{じっかん} のある今 ^{いま} が一番 ^{いちばん} 大切 ^{たいせつ} だ。	5	4	3	2	1

		そのとおり	まあそのとおり	まあまあ	ややちがう	ちがう
20	わたし しょうらいせいこう 私は 将来 成功するためなら、今の 喜びや幸福を我慢する。	5	4	3	2	1
21	じぶん み じぶん かんきょう 自分の身におこることは、自分のおかれている 環境 によ って決まされている。	5	4	3	2	1
22	にど こ いま たいせつ 二度と来ない今を大切にしたい。	5	4	3	2	1
23	わたし さき とき かんが いま 私は、先のことはその時になって 考えればいいので、今 を大切にしたい。	5	4	3	2	1
24	どりょく ゆうじん ほんとう きも りかい どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解するこ とはできない。	5	4	3	2	1
25	いま たいせつ しょうらい たいせつ 今を大切にできないで、将来 を大切にできるはずがない。	5	4	3	2	1
26	わたし さき いま たいせつ い 私は先のことよりも、今を大切に生きています。	5	4	3	2	1
27	じんせい 人生はギャンブルのようなものだ。	5	4	3	2	1
28	いま しょうらい がまん 今つらいことがあっても、将来 のためになるなら我慢するべ きだ。	5	4	3	2	1
29	さき よ わ かんが しかた 先のことは良く分からないので、考 えても仕方がない。	5	4	3	2	1
30	しょうらいなに かんが やく た 将来 何になるかについて 考えることは、役に立つ。	5	4	3	2	1
31	じぶん ゆめ じんせい 自分の夢をかなえるためにかんばるのが人生だ。	5	4	3	2	1
32	さきさき けっか う わ ときどき 先々よい結果を生まないだろうとわかっていても、その時々 の結果欲しさで勝手な行動をしやすい。	5	4	3	2	1
33	どりょく じぶん ちから 努力すれば、どんなことでも自分の力 ができる。	5	4	3	2	1
34	いま かし しょうらい わ 今していることの価値は 将来 になって分かるものだ。	5	4	3	2	1
35	べんきょう しょうらい あまり 勉強 しなくても、将来 なんとかやっけていける。	5	4	3	2	1
36	ばあい じぶんじしん けつだん ほう けっか う たいていの場合、自分自身で決断した方が、よい結果を生む。	5	4	3	2	1
37	わたし すば と はや あ 私は、素晴らしいものに飛びつくのも早いが、飽きるのも	5	4	3	2	1
38	こうふく ふこう どりょく 幸福になるか不幸になるかは、努力しただい。	5	4	3	2	1
39	わたし もんだい お こま まえ 私は、もし問題が起こっても困ったことになる前になんと かなると思っているので、先のことは気にしない。	5	4	3	2	1
40	じぶん いっしょう おも い 自分の一生 を思いどおりに生きることができる。	5	4	3	2	1
41	しょうらい うん き 将来 は、運やチャンスによって決まる。	5	4	3	2	1

		そのとおり	まあそのとおり	まあまあ	ややちがう	ちがう
42	自分の身におこることを自分の力ではどうすることもでき	5	4	3	2	1
43	努力すれば、だれとでも友人になれる。	5	4	3	2	1
44	努力するかどうかと、成功するかどうかとは、あまり関係	5	4	3	2	1

質問7 あなたにとって、一番大切な時はいつですか？ 1つだけ選んで○印をつけてください。

ア：過去 イ：現在 ウ：未来

それを選んだのはなぜですか？

()

他のものを選ばなかったのはなぜですか。

()

質問8 下の文章を読んで、今度は4つの中から答えてください。

		そのとおり	まあそのとおり	ややちがう	ちがう
1	たいていにおいて、私は自分に満足している。	4	3	2	1
2	自分は全くだめな人間だと思ふことがある。	4	3	2	1
3	私は、いろいろな良い素質を持っている。	4	3	2	1
4	物事を人並みにはうまくやれる。	4	3	2	1
5	自分には、自慢できるところがあまりない。	4	3	2	1
6	なにかにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。	4	3	2	1
7	私は、少なくとも人並みには、価値のある人間である。	4	3	2	1
8	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。	4	3	2	1
9	自分が敗北者だと思ふことがよくある。	4	3	2	1
10	私は、自分のことが気に入っている。	4	3	2	1

質問9 あなたは将来、どのような仕事に就くか決めてありますか。次のア・イの中から1つだけ選んで○印をつけてください。

ア：決めていない。

イ：決めている。(具体的にどのような仕事ですか。ここに記入→)

質問10 次に書いてあることは、あなたやあなたの考えていることとどれくらい近いですか? 「そのとおり」から「ちがう」までの5つの中から、あなたの考えにあってるものを選んで○印をつけてください。

1	失敗は成功のもとだとおもう。	5	4	3	2	1
2	小さなことが気にかかるほうだ。	5	4	3	2	1
3	どんな人生でもいいことは必ずあるとおもう。	5	4	3	2	1
4	人の欠点があまり気にならない。	5	4	3	2	1
5	失敗が多くてもあきらめがつく。	5	4	3	2	1
6	人生はいいときもあれば悪いときもある。	5	4	3	2	1
7	ちょっとくらい失敗は気にしない。	5	4	3	2	1
8	物事には失敗はつきものだ。	5	4	3	2	1
9	人が失敗を繰り返すのはあたりまえである。	5	4	3	2	1
10	自分が失敗することは許せない。	5	4	3	2	1
11	ちょっと寂しそうな人がいると冗談などと言って笑わせたくなる。	5	4	3	2	1
12	人をなぐさめるために、自分の失敗をおもしろおかしく語る	5	4	3	2	1
13	友達を励ますために笑わせようとする。	5	4	3	2	1
14	人を救うようなユーモアが好きだ。	5	4	3	2	1
15	嫌なことがあっても笑いとはせる。	5	4	3	2	1
16	あわてたり、騒いだりしている自分をこっけいに感じて人と笑うことがある。	5	4	3	2	1
17	人が喧嘩を始めそうなとき、ユーモアを使って仲をとりもつ。	5	4	3	2	1
18	気がめいるようなときでもユーモアで自分を励ます。	5	4	3	2	1

これでおわりです。つけ忘れがないか、もう一度、1枚自から見直してください。

*** 御協力ありがとうございました。***